

## 脳血管から認知症予防の新時代を考える



日本認知症予防学会理事  
奈良県立医科大学 脳神経内科学講座 教授  
杉江 和馬

アルツハイマー病に対する疾患修飾薬として新規抗アミロイドβ抗体薬が2023年12月、2024年11月に本邦において相次いで承認されました。この画期的な新薬の登場により、認知症診療はまさに新時代を迎えています。これら新薬の投与対象は「アルツハイマー病による軽度認知障害および軽度の認知症」患者です。より迅速かつ正確な認知機能の評価とともに、アミロイドβの蓄積の確認が求められます。

認知症の治療環境が大きく変化することは、認知症患者はもとより、今後認知症を発症する可能性のある健常者にとっても大きな福音です。一方で、中等度以上の認知症やアルツハイマー病以外の患者はこの新薬の対象外とはいえ、対症療法や進行抑制の対策が引き続き必要です。それゆえ、健常者においても認知症患者においても「認知症予防」の視点は重要です。

2024年のLancet誌で、認知症予防における介入可能な因子として、2020年に報告された12因子（教育不足、頭部外傷、運動不足、喫煙、過度の飲酒、高血圧、肥満、糖尿病、難聴、うつ病、社会的孤立、大気汚染）に加え、高LDLコレステロール値と視力喪失の2因子が追加されました（Livingston G, et al. Lancet, 404:572-628, 2024.）。これらすべてで45%予防できるとされています。このうち、特に直接脳血管に影響与える因子である喫煙、過度の飲酒、高血圧、糖尿病、高LDLコレステロール値だけで14%にのぼり、予防因子の1/3を占めます。この点からも、生活習慣病を含めた血管性因子の管理が重要で、脳血管から認知症予防を考える取り組みは喫緊の課題です。アルツハイマー病の予防および進行においても血管性因子の管理は重要です。

認知症発症・進展と脳血管の機能的・器質的障害との関連はこれまでも多くの研究がなされてきました。新薬が登場した新時代において、認知症診療のあり方を脳血管の視点から考える必要があります。脳血管から認知症予防の新時代を考え、健康寿命の延伸を目標にさらなる学術活動の推進を目指していきたいと存じます。